

バクーニンのペシミズムの問題

(イ)これは彼が生涯をかけた革命運動に晩年かすかな憂うつを持つ傾向が表われたと云うこと。

(ロ)この傾向があったかどうか確かめることが先決問題かもしれないが、(イ)の具体的意味は、彼は壮年期においても、大工、仕立職、石工、機械熟練工に所謂、アルチザン達の自覚と組織の発展を強く希求し、又、高く評価していたが、後期になって円熟するに従って、若し、労働者たちが自己の使用する機械や仕事の科学を真に認識していない状態のまま、革命が行われても、その革命は古い制度を倒しただけで、それは強権主義者の利用する処となり、労働者は依然として機械奴隷として終始するのではないかと云う杞憂から来たのだと思える。

(ハ)の系として、
最近、中共の人民公社運動の中に表われている問題がある（これを強制労働の姿とみるかどうか論じてもらいたい。）

吾々は、少しく研究して見たのであるが、例えば、土式の問題（土で造った測量器から溶鉱口の製作、又は、種々なる合成農村工業が、ほとんど全部、土カメ、瀬戸の鉢を土管でつないだ独創的な様式の機構）や、竹工（竹のトラックの車体、バネ、牛車バネ等の使用）などの創造の過程に、アナキストに近親なものがあるような気がしてならない。

例えば、吾々はクロヤカーペンターが「農村には至る処に、珠玉のようなアルチザンがいる」と云っている言葉を思い出すが、これらのアルチザンやクラフト・マンは、中国資本主義機構内では、清朝末期の泥作行規や竹工行規からも、同われるように、クラフト・ギルドの衰微と共に発生した職人組合出身の人達や、移動性を持った渡り職人の流れを汲む人達、及び、村に住みついて隣人達に調法がられた職人達から成っているだけであつたが、中共が古い制度を倒し、新らしく自分達が再出発をなすに当って、近代企業をほとんど持たない中国が生き変るためには、バクーニンがアルチザンの組織を重要視した如く、又、晩年、マルクスが自分の理論に不安を感じていた当時、ヴィラ・ザスリッチのミール制に対する質問に答えて、このロシアに於ける協同と共有の古い制度を高く評価し、「資本主義的生産段階を通過することなしに、直接高度の社会的発展形態に達することが出来ると信ずる」と述べているように、近代産業の皆無に近い中国が自立するためには、第一に農村の自立が急務であり、その急務を実践に移すためには、これらのアルチザン達の自己発意と組織にまつより外に方法がないことは、毛沢東ならずとも、誰でも心ある者の感ずることだと思われる。

従って、中国農村運動は、合作社運動も人民公社運動も、その過程は強制労働では説明が

つかず、人民の希望と毛沢東らの意志（どちらが先であるかを決定することは重要だが）との合体と見なければならぬものではないか。

△アルチザンの新しい重要性、△科学的客観的な農村科学が考へても及ばなかった意外な、所謂、超現実的な成果の出現、△人民公社のデストロクト化（クロボトキンがフランス革命史の中で使った用語）が表われていないかどうか。

（関西同志との合同会議のために。）

……これは……
……
……